

23	幸田	幸田小学校	シンタニ タクヤ 新谷 拓也
----	----	-------	-------------------

分科会番号	12a	分科会名	自治的諸活動と生徒指導 小学校
-------	-----	------	--------------------

**多様な他者と協働し、集団や社会に参画する力を高める特別活動
～6年特別活動「わたしたちがつくる『シン・幸田小』」の実践を通して～**

1 主題設定の理由

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、子どもたちは仲間と関わることに制限がかかり、互いのよさを知る機会や協働した取組を経験することができずにいた。本学級の子どもたちは、相手のことを深く知ろうとせず、仲のよい子だけと関わるため、グループ活動を行うと人任せになっている。予測困難な未来社会を担うこれからの子どもたちが、社会の変化に受け身で対処するのではなく、自らの可能性を最大限発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら作り出せるように必要な資質・能力を確実に育成していくことが大切である。そのためにも、集団や社会の形成者としての見方や考え方を働かせながら、子どもたちがよりよい自分や学校生活、人間関係を築く活動を通して、共生社会でよりよく生きる力を獲得することができる特別活動の果たす役割が一層重要になっている。

そこで、子どもたちが主体的に学校生活における課題を発見し、互いの違いを認め合いながら仲間と協働してよりよい学校づくりを行うことができるようになってほしいと願い、本研究に取り組むことにした。

2 研究の方法

(1) 目指す子ども像

研究主題を基に、具体的に目指す子どもの姿を次のように設定した。

- ・自分の学校をよりよい学校にしていこうと、自ら働きかけることができる子
- ・違いを認め合いながら、仲間と共に、なりたい自分に向けて行動することができる子

(2) 研究の仮説

仮説 1
学校生活において、自分たちで企画・運営する活動（行事など）を設定すれば、よりよい学年・学校をつくろうと、自ら働きかけることができるようになるだろう。

仮説 2
仲間との違いを認めながらも、互いに思いを尊重し、共に折り合いをつけていく話し合いの場を設定すれば、仲間と共になりたいたい自分に向けて、行動することができるようになるだろう。

(3) 研究の手だて

ア 仮説 1 を検証するための手だて

手だて①自分たちで企画・運営する活動、行事の設定

児童会で令和5年度の児童会スローガンを「あいさつができる幸田小ファミリー」とした。スローガンに近づくために、子どもたちが企画・運営する活動を設定することで、自分たちが学年・学校をよりよくしていこうとする気持ちを高められるようにする。

手だて②学年討論会、企画委員（児童会）との連携

子どもたち一人一人が自分事として捉えられるように学年討論会を設定する。児童会は企画代表と呼ばれるリーダーが3名と各学級の代表（企画委員）が2名ずつの13名で構成されている。企画委員と連携しながら学年討論会等を進めていくことで、学年の課題を自分事として捉えられ、学年の一員としての自覚が芽生えていき、自ら働きかけられるようにする。

イ 仮説2を検証するための手だて

手だて③学級や学年の仲間と話し合い、合意形成を図る場（課題解決）の設定

学年討論会で定めた方向性を基に、関わり合い活動を目的とした「幸田小ふれあい祭」を企画・運営をしていく。自分事として捉えられるようになった子どもたちは、自らの意見を発表し、「幸田小ふれあい祭」についての学年討論会に向けて学級案を考える。互いの意見やその理由を聞いていく中で、仲間との違いを認めながらも、互いの思いを尊重し、共に折り合いをつける話し合いにしていく。

手だて④話し合いにおける教師の支援のタイミングと工夫

話し合いが停滞したり、方向性がずれたりしたときに、教師が指導や助言をする。また、子どもたちの意見を可視化できるような教師支援をすることで、互いの思いを尊重しながら折り合いをつけ、仲間と共になりたい自分に向けて、行動できるようにしていく。

(4) 単元構想

わたしたちがつくる「シン・幸田小」	
学習活動と児童の思考・意識の流れ	教師支援
<p>自分たちが目指している「互いに助け合える絆のよい幸田小学校」に近づいているか振り返ってみよう※1、2</p> <ul style="list-style-type: none"> 1学期に行ったあいさつ運動では、あいさつが少しずつ増えてきた。しかし、6年生が下級生にあいさつをしている姿が少なかった。 たてわりふれあい活動では、互いのことをあまり知れていないように感じた。 助け合える絆の良い学校に近づいているけど、全員ではない。 他のクラスの人たちがどのように考えているか気になる。 	<p>※1 自分たちが目指す学校の姿を再確認するために、1学期のあいさつ運動やたてわりふれあい活動を行った経緯を確認する。</p> <p>※2 自分たちで学校をよりよくしていくとする意欲を高めるために、学級運営委員を設置し、それらを中心に話し合いを行うようにする。</p>
<p>学年討論会でどうしたら目指す姿に近づけられるか話し合ってみよう※3</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分たちの学級では、互いのことをあまり知れていないと意見が出た。 自分たちのことを知ってほしいし、下級生の子たちを知りたい。 全校で関われる活動「幸田小〇〇〇」をやりたい。 どんな活動が全校で行えるのかな。 	<p>※3 今の幸田小の現状を学年全体で共通理解するために、学年討論会の場を設定する。</p>
<p>「幸田小〇〇〇」の学級案を考えてみよう※4、5、6 本時</p> <p>(Ⅷ) 幸田小たのしみタイム (Ⅷ) 幸田小スケッチアップ (Ⅷ) 幸田小ドミノ倒し</p> <ul style="list-style-type: none"> 互いを知ると言っても話をするだけでは、仲良くできないような気がする。 関わり合いを増やすためには、一緒にになって取り組む活動した方がいかな。 異学年交流をするには、全校でやるより縦割りふれあい活動の班で行うのがいかな。 縦割りふれあい活動で、班の仲間と協力して取り組めることをしてみたい。 	<p>※4 自らの考えをもって話し合いに参加するために、事前に簡単な提案内容について話を聞くようにする。</p> <p>※5 話し合いがスムーズに進行するため、事前に考えた提案を基に話し合いを行うようにする。</p> <p>※6 学校の課題を自分事として考えられるようにするために、自分たちが目指す学校の姿に近づいているか立ち返るようにする。</p>
<p>学年討論会で「幸田小〇〇〇」の案を考えてみよう※7</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分たちの学級では、縦割りふれあい活動の班でドミノ倒しをする意見が出てきた。全校で一緒にやって取り組めることがいいと思うよ。 「幸田小〇〇〇」では、縦割り班で一緒に取り組むことにしていこう。 「幸田小〇〇〇」に向けて、何を準備していけばいいかな。 	<p>※7 自分事として考えるために、どのような行動をするのか、自分には何ができるのかなど、自分自身の行動目標（意思決定）を立てるように促す。</p>
<p>「幸田小〇〇〇」に向けた準備をしていこう※7</p> <ul style="list-style-type: none"> 活動内容と必要な物を決めて、お知らせできるようにしていこう。 他学年の子たちが困らないように内容を工夫しないといけないね。 役割分担をして、「幸田小〇〇〇」の活動をスムーズに行えるようにしたい。 縦割り班が楽しめられるように考えられた役割を一生懸命取り組む。 	<p>※8 「幸田小〇〇〇」の活動を自分事として考え行動するために、自分自身の行動目標（意思決定）を意識して取り組むように促す。</p>
<p>「幸田小〇〇〇」をやってみよう※8</p>	<p>※9 自分たちの取り組みが目標に近づいたか再確認するために、「幸田小〇〇〇」を振り返るようにする。</p>
<p>「幸田小〇〇〇」を終えて、今の幸田小について振り返ってみよう※9</p> <ul style="list-style-type: none"> 「幸田小〇〇〇」を通して、縦割りふれあい活動の班の仲間のことを知ることができた。 下級生を引っ張って活動を進めることができた。 最高学年として全校の二本となる姿をこれからも続けていきたい。 	<p>※10 学校の課題を自分事として捉え、よりよい学校を創っていこうと考えられるために、卒業に向けた話し合いを行うようにする。</p>
<p>卒業に向けてこれからの取り組みについて考えてみよう※10</p> <ul style="list-style-type: none"> 3学期に「幸田小〇〇〇」第二弾を考えたいな。 自分たちが取り組んできた「幸田小〇〇〇」を次の学年につないでほしいな。 6年生に自分たちがどのように取り組んでいたか発表したい。 	

(5) 検証方法

本研究は、特別活動「わたしたちがつくる『シン・幸田小』」の単元を構想して実践する(前頁参照)。単元を通して、抽出児童の変容を追うことで検証を進める。また、必要に応じて、他の児童や学級全体の傾向を検証する。

<抽出児童について>

児童Aは、学級の級訓決めや1年生との交流会についての話し合いにおいて、自らの意見にこだわり、周りの意見を取り入れようとしなかった。また、独りよがりな考えをもっているため、人との関わりがうまくできずに協力して取り組めない姿が見られる。本研究を通して、児童Aが学級や学年の仲間と関わる中で、違いを認め合いながら仲間と協働して、よりよい学年・学校づくりへ自ら働きかけられるようになってほしいと考え、抽出児童とした。

3 実践と考察

(1) 自分たちが目指している姿に近づいているか話し合う(手だて①・②の検証)

今年度の児童会スローガン「あいさつができる幸田小ファミリー」を実現するために、6年生は企画委員が企画・運営してきたあいさつ運動や縦割り活動に取り組んだ。それらの活動を振り返ると、目指す姿に「近づいている」や「近づいていない」と感じる子はそれぞれ同じ数だった。資料1では、児童Aは「近づいている」と考えており、自らもできていると思っている。資料2では、企画委員は「近づいていない」と考えており、学級全員がスローガンに込められた思いを分かっていると考えていた。これらの資料から学級の仲間と企画委員との間にスローガンに対する気持ちのずれができていくことが分かる。振り返り後、企画委員がスローガンに込められた思いを学級の仲間に伝えたいと教師に相談してきた。そこで、企画委員の思いを共有する学級会を開いた。

学級会では、スローガンに込められた願いを企画委員が話した。学校をよりよくしていく強い気持ちをもっている企画委員の話を受けている子どもたちの中には、共感して頷く子もいれば、他人事のように聞いている子もいた。そこで、企画委員だけでなく、子どもたち一人一人に学校をどのようにしていくか教師が問うことで、全員の思いを共有する話し合いを行った。資料3はその授業記録である。最初、児童Aは「自分ができていればそれだけでいい」と発言しており、その理由を聞くと、あいさつができないことは個人の問題だと考えていた。しかし、児童Aに賛同していた児童Cが教師の発問(T3)から「自分から行動するだけでなく、仲間に呼びかけていく」と答えた。児童Cの考えの変化から、児童Aも自分の事だけでなく、学級全体へと意識を変化させた。また、児童Dが企画委員ばかりに学校をよりよくしていくことを任せてはいけないと発言したことで、児童Aも学校のために自ら働きかけて

【資料1 児童Aの振り返り】

目指す姿に近づいている人もいるから少しは近づいている。自分ではできている。

【資料2 企画委員の振り返り】

みんなスローガンにあったあいさつができていない。みんなができなければ学校中であいさつができたとは言えない。

【資料3 授業記録】

児童B: やらないといけなことは分かる。だけど、恥ずかしい。
児童A: 自分ができていればそれだけでいい。
T1: なぜ、そう思うの?
児童A: だって、あいさつは自分ですることだから。一人一人が意識してできればいい。
児童C: 児童Aさんと同じで、一人一人が意識することが大事だと思います。なぜなら、あいさつは他人に言われることではないからかな。
T2: みんなが意識してあいさつができればいいことだけど、現状はどうかな?
児童D: 企画委員の人ばかりがんばっていて周りの人からの呼びかけがない。
児童E: みんながスローガンの願いを分かって、近づけるように取り組まないと意味がない。
児童F: 企画委員に任せっきりにしない。
T3: 人任せにしないためには、自分にとって何ができると思う?
児童C: 自分から行動するだけでなく、仲間に呼びかけていく。
児童A: 仲間に教えてあげるように呼びかける。
児童B: 友達からなら声をかけていけるかな。
T4: 学級で呼びかけていけばあいさつができるようになっていけそうだね。
児童D: でも、企画委員ばかりに任せているから、自分たちで何かあいさつができるようになる活動が考えられないかな。
児童C: それ、いいね。
児童A: やってみたいな。

いこうとする様子が見られた。児童Aは学級会を通して様々な考えに触れ、仲間の意見と自らの考えを比較することで、他者の意見を取り入れようと考えることができた。この学級会を通して、学級全体でよりよい学年・学校にしていこうと気持ちを高めていった。

（２）学年討論会を開いて関わり合い活動を考えてみよう（手だて②の検証）

よりよい学校にしていくための課題を議題とする学級会を開くと、「コロナ禍で異学年の子と関わることができていないため、関わり合いを増やしたい」という意見が出てきた。関わり合いの場を作りたくても、どのように計画・準備を進めていけばいいかわからず、話し合いが停滞していたが、「学級だけでスローガンの実現に向けての取り組みをしても意味がない。学年で一致団結して取り組んでこそ意味があるし、実現できるのでは。」という意見が出た。その声を受け、企画委員会で学年討論会の実施を提案し実行することになった。そのために、企画委員で細かな計画・準備をしたり、各学級の企画委員と連携し、話し合いの進め方などを指導、助言したりした。その結果、学年討論会では、学級の特徴の表れた意見を聞くことができた。児童Aは学年討論会を行う前に、あいさつができるようにするには、あいさつ運動などの活動を工夫するべきだと考えていた。しかし、資料4のように、学年討論会で「関わり合いが減ってしまい、互いを知る機会が少ないため、あいさつができなくなってきた」とか「仲良くなることであいさつの輪は広がっていく」などの他の意見を聞いていくことで、関わり合い活動を行うことであいさつを増やしていけるという考えが生まれ、あいさつ運動などを改善することだけが解決策ではないと気付くことができた。このことは、児童Aだけで

【資料4 児童Aの振り返り】

学年討論会をやってみて、たくさんの学級の考えを聞いた。関わり合いをすることであいさつが増えることに気付いた。違うクラスの友達が発言して、がんばっている姿を見て、自分もがんばらないといけないと思った。

なく、多くの学年の子どもたちも学年討論会で意見が変わっていく様子が見られた。学年として関わり合い活動を増やしていこうという意見が増え、具体的な活動の内容について考えることになった。また、児童Aは、「自分もがんばらないといけない」（資料4）と考えるようになり、学年の課題を自分事として捉え、取り組んでいこうとする様子が見られた。学年討論会を通して、学年で目指すべき方向を決めて話し合っていくことで、学年の一員としての自覚が芽生え、自ら働きかける気持ちを高めていくことができた。

（３）「幸田小ふれあい祭」の学級案を考えてみよう（手だて③・④の検証）

子どもたちは学年討論会后、すぐに学級会を開いた。まず、全校で関わるためには何を目的にするべきか明確にしておく必要がある。話し合いの中で方向性がずれて行く場合が考えられるため、目的を原点として立ち返られるようにした。子どもたちは、二つの目的（心をつなぐこと、会話が生まれること）に合わせた関わり合い活動を考えて意見を出した。話し合いの根幹がぶれないように目的を書いた紙を教室に掲示し、学級会を進めた。

初めに、多様な他者の意見に触れるために、意見の出し合いを行った。次に、出された意見を比べ、項目ごとに意見をまとめていった。まとめていくときにも教室に掲示された二つの目的を確かめながら意見を比べていた。児童Aは、これまでの話し合いを通して少しずつ他の意見を尊重する姿が見られていたが、今回の話し合いでは自らが考えた関わり合いの意見に自信があるためか、他の意見を主張する子と意見をぶつけ合ってしまう、意見の対立によって話し合いが停滞してしまった。しかし、資料5を見ると、「次回からは反論ではなく、納得するような説得をすればいいと思う」と考えていて、他の意見を尊重することが大切だと思っているが、それを上手く自分の意見に合わせる方法が分からないでいることが分かった。そこで、互いのよさを認め、他者の意見を尊重し、共に折り合いをつける話し

【資料5 児童Aの振り返りシート】

反省点としては、今回の議論はやりたかったけれど、次回からは反論ではなく、納得するような説得をすればいいと思う

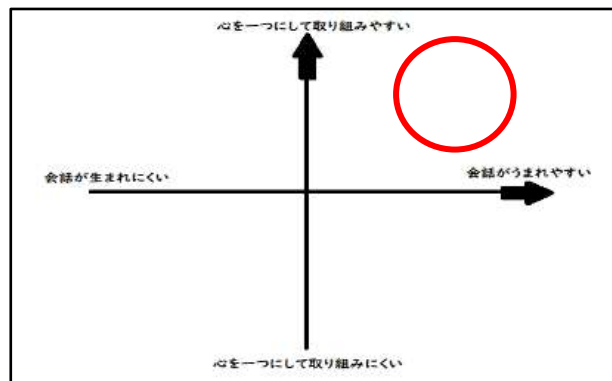
合いにしていくために、思考ツールを活用した教師支援を行った。資料6の思考ツールは、意見の対立による軸を可視化することができる。子どもたちは自分たちの意見が思考ツールのどこにあてはまるか考えるようになった。そして、互いのよいところを見るようになり、折り合いをつける話し合いになっていった。児童Aは資料7のように、可視化された意見を見て、資料6の赤色の円の位置にあるものが最も自分たちの思いが含まれた意見だと全体の場で発表した。その発表から対立していた話し合いが一つにまとまっていき、よりよい学級案を作ることができた。資料8の振り返りからは、合意形成を図る話し合いにおいて、思考ツールを活用したことは、互いのよさを認め、尊重し、折り合いをつけるのに有効であったことが分かる。学年討論会では、各学級の意見のよいところを合わせていく話し合いになり「幸田小ふれあい祭」を開催することが決まった。

(4)「幸田小ふれあい祭」に向けて準備し実施しよう(手だて①の検証)

児童Aは、自分たちで企画した「幸田小ふれあい祭」の準備を積極的に取り組んだ。「幸田小ふれあい祭」の準備で、班でどのようなレクリエーションを行うか話し合いをした。児童Aは誰もが分かりやすい内容で楽しめるレクリエーションとしてジェスチャーゲームを提案した。班の仲間はその案を聞くと「いいね」「それがいいと思う」と児童Aの意見に賛同した。児童Aは自分を認めてもらえたと嬉しくなり、次々とやりたいことを意見として出した。資料9を見ると、様々なことが児童Aの意見で進んでいたが、班の仲間が言った意見を取り入れようと仲間を尊重する姿が見られた。児童Aはこれまで独りよがりな考えをしていたため、仲間とうまく関わり合うことができずにいた。しかし、学級会や学年討論会を通して、互いのよさを認め、相手を尊重することができるようになり、仲間と協力して「幸田小ふれあい祭」の準備をすることができるようになった。

「幸田小ふれあい祭」では、時間をかけて

【資料6 思考ツール】



【資料7 授業記録】

- 児童G：幸田小ウォールスは、会話が生まれにくいし心を一つに取り組みえないと思う。
 児童H：幸田小ミステリーはチームで謎を解き明かしたときに達成感が生まれるけど、謎によっては会話が生まれにくそうだよ。
 児童I：幸田小クラフトは、タワーを積んでいくからたくさん詰めた時にチームでの達成感が生まれそうだね。
 児童J：それに、タワーを積むときに相談すると思うから会話も生まれそうだよ。
 児童A：幸田小クラフトは思考ツールの右上の位置に意見が集まっているから、自分たちの思いに合ったものになっていないかな。
 児童K：たしかに、幸田小ミステリーは軸の左上に意見が集まっているけど、幸田小クラフトは右上に集まっているね。

【資料8 授業記録】

自分の意見で学級案をまとめることができた。思考ツールは自分たちの意見がどの位置にあるか見やすかった。学年討論会では、他の学級がどんなことを考えたか気になるから早く聞いてみたい。

【資料9 授業記録】

- 児童A：ジェスチャーゲームの問題を考える担当はLさんでいいですか？
 児童L：私だけだと難しいから、誰かと一緒に出来ない？
 児童A：他にやってくれる人がいるといいけど。他にやってくれる人いる？
 児童M：ジェスチャーゲームの説明の担当になっているAさんが一緒にやればいいんじゃない。
 児童A：なんで自分がやらないといけない。Lさんは担当がないじゃん。
 児童M：たしかに、担当はないけど、問題を一緒に考えたほうが、説明担当としても分かりやすくないかな。どう？
 児童A：そういうことか。それならいいよ。Lさん、一緒に考えよう。

【資料10 幸田小ふれあい祭の様子】



準備をしてきたグループの仲間と協力して、下級生を楽しませることができた。児童Aはゲームの説明で分からないと困っている下級生の様子を見ると、すぐに声をかけ、優しく教えていた。(前頁資料10)全員が楽しめるように、周りの様子に気を遣いながらレクリエーションを行い、楽しませたことに満足していた。資料11の振り返りで、児童Aは準備をしていたことがうまくやれなかったことに反省

【資料11 児童Aの振り返り】

反省をしたら、良かったこと、行ってきたことを
国策にしようとしたこと、2. 準備ができていたこと
準備ができていたこと、良かったこと、良かったこと
良かったこと、良かったこと、良かったこと、良かったこと
良かったこと、良かったこと、良かったこと、良かったこと

をしていたが、自分たちで企画した「幸田小ふれあい祭」を行うことができ、目的が達成したことに喜びを感じていた。自ら企画・運営をし、行事を作り上げようとしたことは、よりよい学校をつくろうと自ら働きかける気持ちを高めることにつながった。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 成果について

仮説1において、手だて①では、子どもたちが「幸田小ふれあい祭」を企画・運営したことで、一人一人がよりよい学校をつくろうと仲間の意見を尊重し、仲間と協力して取り組む姿が見られた。自ら企画・運営をし、行事を作り上げようとしたことは、よりよい学校をつくろうと自ら働きかける気持ちを高めることにつながった。手だて②では、学年討論会に向けて企画委員と連携し、よりよい学校にしていくための課題を議題とする学級会を開いた。学校の課題に対して学年全員で考え、話し合ったことで、多くの子どもが学年の一員であることを自覚し、学校の課題を自分事として捉え、自ら働きかけられるようになった。その後、「幸田小ふれあい祭」では、自ら関わりをもとようと、他学年の子に声をかけたり、目的を達成できるようにしたりする姿も見られた。

仮説2において、手だて③では、仲間との違いを認め、互いの思いを尊重し、共に折り合いをつける話し合いができるように合意形成の場を設定した。学年討論会で定めた方向性を基に、「幸田小ふれあい祭」の学級案を考えた。全校で関わる目的を学級で考え、その目的に常に立ち返らせるようにしたことで、方向性がずれない話し合いにすることができた。また、全校で関わる目的を教室に掲示することで、常に、目的を確かめながら意見を比べ、話し合うことができていた。互いの意見やその理由を聞いていく中で、互いの思いを尊重しながら折り合いをつけようと自分の意見を言う姿が見られた。手だて④では、子どもたちが考えに行き詰ったタイミングで指導・助言を行った。「幸田小ふれあい祭」の学級案を考えているときに、意見の衝突があり、話し合いが停滞したり、方向性がずれたりした。互いの思いを主張するばかりで話し合いが停滞したときには、思考ツールを活用し、意見の対立による軸を可視化した。意見を可視化することで、それぞれの意見が軸に対してどの位置にあるか確認することができ、互いの思いを尊重しながら話し合いを進めることができた。また、方向性がずれた時には、教室に掲示した全校で関わる目的を確認するように助言することで、目的に合った話し合いを進めることができた。

その結果、学校の課題を自分事として捉え、課題解決に向けて仲間と協働しようとする子どもたちが増えた。

(2) 今後の課題

186人もいる学年の子どもたちの意識をまとめていくために、企画委員と連携をとり、その都度指導や助言を行ってきたが、どうしても学級ごとで若干の意識のずれが生じてしまった。子どもとの連携だけでなく、担任同士も連絡を取り合い、指導の方向性を確認していくことが重要であると認識した。今後も、子どもたちが企画・運営していく活躍の場をより増やしていくことで、さらに仲間と協働し、集団や社会に参画する子どもの育成を追究していきたい。